

三一書

生 体 実 験

清 水 昭 美 著



清水 昭 美
しみず てる み

1954年 高等看護学院を卒業
約5年間、臨床看護にたずさわる

現在 看護教育に従事

現住所 神戸市東灘区本庄町深江磯島76

生 体 実 験

定価 230 円

1964 年 3 月 9 日 第1版発行

著 者 © 清 水 昭 美
1964 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 暁印刷株式会社

製 本 所 永 井 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話 東京 (201) 9581~5番

振 替 東 京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 420

生 体 実 験

清 水 昭 美 著

三 一 書 房

ま
え
が
き

きこえる

あの声

密室の乳児のもだえ

耳をすませ

「ゆうれい児」の

かなしきなき声に

防備されたま白い壁の中。巨視的な視覚を麻痺させ、試験管の中の変化にのみ閉じこもろうとする医師の人びと、目先の命令にのみ従順であろうとする私たち看護婦。それらの人びとの手によって生体実験は、こともなくおこなわれつつけられていた。

当時、実施されたばかりの「完全看護」制は、生体実験という日本の医学界の「夜と霧」の実状を、民衆の眼から隔離するために、みごとな壁の役わりをはたしたのであった。そして、療育施設という社会事業の重要な部分である乳児院の乳のみ児は、この真理追求の美名のもとにつくられたワルソー・ゲットウへ送りこまれたのであった。いわば、近代医療と社会事業という、人間の最も崇高な領域が、最もおぞましい行為の舞台となったのであった。そして、それは、いまなお続けられている。この日本のどこかで。あるいは、この本の読者の住んでいるその同じ街のなかで。

そして、私たち看護婦もまた、象牙の塔の奥深い「夜と霧」のなかで「近代医学」の使徒を自称するアイヒマンたちの野心をみたす一齒車であること、をよぎなくされているのだ。

「白衣の天使」とは誰が名づけたのであろう。私自身、自分の白い制服が、魔女裁判の拷問吏のあの無気味な漆黒のガウンと化しているのではないか、という恐怖にかられたことさえある。見せかけの白は、容易にはかの色に変わるのであった。ある時は褐色に、ある時はうす汚ないねずみの色に、そして時には暗黒の恐怖の色になるのであった。

ふと、気づいたときには、心から憎悪した「既成看護婦」の鑄型にびっちりとはまり、患者や家族に対して巧みに演出する、ずるがしこい看護婦になりきっていた。ここに書いたのは、そういう私のみにくい体験の記録である。

私たちの恥部ともいふべき数々の問題を、労働組合の組織の闘いとして展開できなかったの

は残念である。医師が組合幹部であり、生体実験の担当者の医者が組合員という中で、組合は役に立ちようがなかった。看護婦は、自らの待遇改善にも分裂しがちであり、乳児院からきた乳児のために団結をもとめることなど望むべくもなかった。

何もかも、書かねばならない、ありのままに、と、思いつたまま長い年月が流れた。その間、たえず書くことをすすめて下さったX先生（ここには名前を記すことができないが）の励ましと御指導により、ようやく今日までの努力を続けることができた。

さらに、村上信彦先生には、「専門の職業の人たちが、それぞれで書くこと」と御指導と激励をいただいた。また痛療養中にもかかわらず出版のためにお骨おり下さった。

また、これを記すために、多くの良心的な医師、看護婦、その他の方々（その多くは私の体験した職場とは無関係であった）の御協力をいただいたが、今の医療界の現状では、ここに名前を記すことができない。いまなお復讐と脅迫の刃がとぎすまされているのだ。

この本の出版にさいして、三一書房の竹村一氏に一方ならぬ御援助をいただいた。ここに、あわせて御指導と御支援下さった各氏に深い感謝をささげたい。

今後とも、よりよい医療の方向づけに努力したいと思うので、みなさまの御批判、御意見、体験などを寄せていただければ幸いである。

目

次

まえがき

1 生体への実験

一 鍵の部屋

二 ゆうれい

三 研究第一、治療は第二

四 一万円のモリアミン

五 ゆうれいの実験

六 新聞に発表された生体実験

七 殿部のただれ

八 研究の協力

九 解 散

一〇 強化する実験

三

二

二

二五

三

六

四

六

六

六

二〇

二〇

2	囲われた命	二九
3	死後の笑い	二三
4	詫びながらの死	二四
5	優秀な患者	二五
6	とびおり自殺	二五
7	生命短縮術	二七
8	演出	二八
9	深夜勤	二七

1 生体への実験

一 鍵の部屋

大学病院の四階に「通行禁止」の一角があり、そこに一日中どの窓も白いカーテンで閉ざされた病室がある。内部をうかがうことができないように入口はいつも鍵がかかっている。またそこで働くものは、中のできごとについて固く口止めされている。同じ小児科の職員でも係でないものは入ることができない。

閉ざされたその部屋の隣の未熟児室で私は働いていた。だが、隣のできごととは全く知ること

ができない。同じ廊下づたいにつとめながら、内部のことを尋ねることすらタブーになっていた。ただわかつていいるのは、鍵の部屋は乳児が入れられているということ、その中には未熟児室で私たちが育てた乳児も何人か寝ているということだけである。

ある日、準夜勤（午後四時～午前零時の勤務）の調乳係の看護婦が急に病気になる、やむなく私は四時までの勤務にひき続いて準夜勤の調乳にかかっていた。すると、突然、

「ちょっと、見てもらえない？」

という声。調乳室の入口で、目がすがりつくように私を捕えていた。「今すぐ頼む」といったげに、相手はなかば口を開いたまま動かない。禁断の部屋だ。かすかなためらいが走った。次の瞬間、「そうだ。その密室の中がみられる。こんなチャンスはまたとない。」私は誘導されるように、その乳児室勤務の松崎看護婦の方に一步踏み出していた。誰もみたことのない内部がみられるではないか。特に鍵をかけて人目をさけている、そのものが、たった今見られる。だが、係でないものを呼ぶなどは、これまでにないことだ。私は、そそくさと松崎看護婦に従った。

開けたとたん、ムーンと甘酸っぱい強烈な臭が鼻をついた。おしめの汚れとミルクの臭気。その中で乳児が寝ている。ベッドの間をぬいながら見おぼえのある顔を探した。どの子も、どの子も鼻からビニール管が入っている。ビニール管は、ミルクの空缶にたくさん巻きつけられ、それをすこしずつ解いて通し続けるのだ。ビニール管は、鼻腔から食道を通り胃に達し、さら

に十二指腸から小腸を経て大腸へ行き、肛門から出る。これは、医師たちが乳児栄養、特に乳糖代謝とビフィズス菌について研究しているので、腸管内部の液を自在に吸引採取し消化状態を観察するためである。つまり小腸下部の内容を観察しようと思えば、通しつづけているビニール管の側壁に小さな穴を開けて飲ませる。そして小腸の下部に達する時間を測定して固定し、内容を吸引するのである。

松崎看護婦は、一番奥のベッドへ私を呼んだ。誰か？ 胸さわぎを覚えてかけよった。

「浅野ベビー！」

私は驚くと同時に不吉な予感があつたことをおそれた。ついこの間まで未熟児室でわたしが育てた子供だ。

「ずっと、ぐずってばかりなの。口をハアハアさすから、咽喉が乾いているのかと思って湯さましあげたら、いくらでも飲むのよ。」

私が、調乳しているとき、湯さましを二回取りに来たが、浅野ベビーに飲ませるためだったのだ。

口をあけ、せまるような息づかい。何かから逃がれたいかのような身悶え。生気のない目が、落ちつきなく何かを求めている。ビニール管が、右の鼻から促進した呼吸のたびに、出たり入ったりする。腸の蠕動運動で内部へたぐり寄せられるビニール管。それをあえぎながら拒否しようとする。それは生き物の抵抗。毎日休みなく鼻腔から肛門まで管を通されたまま。赤ん坊

は、せわしい息づかいをもらすだけで泣き声をあげない。声を出す力が、もはやないようにみえる。

額にそっと手を当てた。熱い。異常だ。

「お熱は？」

「三八度五分よ。」

松崎看護婦はもてあましていた。誰でもこれだけ熱があれば、頭が痛い。気分が悪い、冷したい、診てもらいたい、何か薬、と訴えるに違いない。けれども、この小さな赤ん坊は、言葉もいえず、拒否もできずに横たわったまま、じっと堪えようとしている。

なぜ、当直医を呼ばないで私を呼んだのだろう。

病気だろうか。もしや？

他に病状は。もっとくわしくからだをみなくてはならない。

「随分、つらそうだけど、おなかは？」

と、ことわりながら、おしめをはずした。

膨満。腹部の表面が波打って、小刻みにする腹式呼吸。手をふれると、「ハア、ハア」とあえぎながら、どろんとした目を私にむけた。半ばあきらめたような、力ないまなざしの底に、訴えと怒りが、こもっている。

腹部は異常に堅く、下腹部は特に腫瘤があるように堅い。

「便はどうなの？　もしかして管がつまっていやしないかしら？」

ためらいながら尋ねた。ピクッと松崎看護婦の目に警戒の色が走った。頼まれたとはいうものの、禁断の部屋に入り、最も恐れているものにふれた。

迫るような長い時間。ややあって、

「そうかもしれない……管が、なかなかでて来ないから……。」
と、つぶやいた。

あきらかにイレウス症状（腸閉塞症の症状）。すぐに浣腸でもしなければ……。しかし、私はこの勤務ではない。

「欲しがっても飲ませないで、それより浣腸かガス抜きでもしてみよう必要があると思うけど。……でも熱があるから、当直医にみてもらったらどうかしら？」

ついこの間まで、未熟児室で抱いていた浅野ベビー。身長僅か五五糶にもたりないからだを、もがかせながら見上げる目。私をおぼえているのだ。訴えと期待が奥底に燃えている。

これまでは、私たちが暇があると乳児をあやすのに自由に入れたものだ。それどころか貧しい子供たちを収容しているので、後援団体にみてもらうために見学しやすいようにさせていた。それが、つい最近、院外の人はもとより、家族にも部屋の内部を見せないようにしている。小児科の医師、看護婦さえも、この部屋の係以外は入室できなくなった。何故か。

あらためて室内を見回した。酸性をおびたこの臭気は何んだらう。同じように乳児を預って